県営畑地帯総合整備事業野辺山地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

－長野県南牧村内－

矢出川遺跡群
（やでがわいせきぐん）

2004.3

長野県佐久地方事務所
長　野　県　南　牧　村
長野県埋蔵文化財センター

県営畑地帯総合整備事業野辺山地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

－長野県南牧村内－

矢出川遺跡群
（やでがわいせきぐん）

2004.3

長野県佐久地方事務所
長　野　県　南　牧　村
長野県埋蔵文化財センター

矢出川遺跡群土層断面

矢出川遺跡群出土石器

序

本書は、平成11年から15年度に南牧村で実施された県営畑地帯総合整備事業野辺山地区幹線5号拡幅に伴う矢出川遺跡群の発掘調査報告書であります。その成果をここに記録として保存し、広く市民に公開いたします。

川上村に源を発し、日本海に注ぐ千曲川。矢出川遺跡群は、その支流である矢出川の左岸、八ヶ岳の主峰の一つである赤岳の東南麓、野辺山原の南部に位置しています。

野辺山原は高原野菜の産地として有名であります。同時に日本列島の旧石器文化に細石器文化の段階があることを考古学的に最初に明らかにした矢出川遺跡群が存在することでも、広く知られております。

矢出川遺跡群や細石器文化をめぐる研究は今に至るまで、数多く積み重ねられてきており、野辺山原一帯は細石器文化の宝庫であることが分かってきています。矢出川遺跡群の一部は、国史跡として保存されておりますが、国史跡範囲だけでなく、広く矢出川遺跡群全体の構造が明らかにされていくことがこの地域の文化の様子を明らかにする上で重要と考えられます。

そうした中で、今回の発掘調査の成果が、多少なりとも活用されることになれば、幸いです。

また、最後となりましたが、発掘調査から整理作業および報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた県佐久地方事務所、南牧村・同教育委員会など関係機関、直接ご指導・ご助言いただいた長野県教育委員会文化財・生涯学習課、また発掘・整理作業に携わっていただいた多くの方々に感謝を表します。

平成16年2月23日

(財) 長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター

所長　深瀬　弘夫

例　　言

1　本書は県営畑地帯総合整備事業野辺山地区幹線５号拡幅に伴う南佐久郡南牧村所在矢出川遺跡群の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は県佐久地方事務所・南牧村が、財団法人長野県埋蔵文化財センター（現財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター、以下県埋文センター）に委託して実施したものである。

3　整理作業は、県埋文センターで実施した。

4　本書で使用した地図は県佐久地方事務所作成の地形図（1／500、1／10,000）、南牧村作成の村図（1／25,000）、国土交通省国土地理院発行の地形図「八ヶ岳」（1／50,000）、「八ヶ岳東部」（1／25,000）などをもとに作成、複写した。

5　委託関係では地形測量および上記４以外の地形図の作成を株式会社新日本航業に依頼した。

6　発掘調査および整理作業の分担などは本書第１章に一括掲載してある。

7　本書の編集ならびに執筆は川崎保調査研究員が廣瀬昭弘調査一課長の指導のもとに行った。

8　石器実測については、鶴田典昭調査研究員の協力を得た。

9　本書で報告した遺跡の記録および出土遺物は将来的には南牧村教育委員会に引き渡される。

凡　　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。ただし、地形図、遺跡調査範囲、遺構配置図などは任意である。

遺構実測図　土坑（1／60）　主な遺物実測図　石器（2／3）　土層柱状図（1／20ないし1／40）

2　遺構の番号は以下のとおり付けてある。

土坑（SK）は１から始まっている。

3　試掘トレンチの名称は、年度ごとの通し番号となっている。

例）平成12年度19トレンチ。

4　調査（グリッド）区を設定したのは遺構が検出された平成13年度発掘調査のみで、それ以外の年度の位置などは国土座標（旧日本測地系）で示している。

本 文 目 次

巻頭図版
序
例言
凡例
本文目次
挿図目次
写真図版
第1章　序説……1
　第1節　調査の経過……1
　第2節　調査の方法……2
第2章　遺跡の環境……5
　第1節　地形・地質的環境……5
　第2節　歴史的環境……7
第3章　遺跡と調査の概要……10
　第1節　遺跡と調査地の概要……10
　第2節　調査範囲と経過……10
　第3節　基本層序……16
第4章　遺構……17
　第1節　土坑……17
　第2節　ローム マウンド……20
第5章　遺物……21
　第1節　石器……21
第6章　成果と課題……22

挿 図 目 次

1　大々地区と調査範囲
2　大地区と調査範囲
3　中地区割付
4　南牧村の位置
5　矢出川遺跡群の（調査範囲）位置
6　野辺山原地質図
7　矢出川流域の遺跡分布図１
8　矢出川流域の遺跡分布図２
9　調査年度・内容と範囲
10　平成11年度試掘調査地点
11　平成12年度試掘調査地点
12　基本土層
13　平成13年度調査範囲及び遺構配置
14　平成14年度調査範囲
15　土坑その１
16　土坑その２・ロームマウンド
17　石器

写 真 図 版

巻頭図版上　矢出川遺跡群調査風景
巻頭図版下　矢出川遺跡群出土石器
写真図版１　平成11年度試掘調査
写真図版２　平成12年度試掘調査、平成13年度調査
写真図版３　平成13年度調査
写真図版４　平成13・14年度調査
写真図版５　平成14年度調査
写真図版６　平成14年度調査
写真図版７　平成14・15年度工事立会

第1章　序　説

第1節　調査の経過

1　発掘調査委託契約

長野県佐久地方事務所（以下県佐久地方事務所）は、県営畑地帯総合整備事業（野辺山地区）により、昭和61年より農道（幹線5号）の整備を開始した。今回、整備・拡幅が予定された範囲は、国道141号からJR小海線野辺山付近から分岐した幅5ｍの現道をのべ800ｍにわたって幅8ｍに拡幅する部分である。平成9年に事業が着手された。事業地は、細石器などの遺物の包蔵地・散布地として有名な矢出川遺跡群内にある。そこで、県佐久地方事務所、長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下県教委）、南牧村教育委員会（以下南牧村教委）の三者によって埋蔵文化財の保護協議が行われた。

事業地に隣接する畑地からは、昭和50年代半ば以降に実施された明治大学の総合調査で黒曜石が採集されている（南牧村教委1982）が、遺跡の内容・範囲については不明の点も少なくないので、確認する必要が認められた。村教委では調査体制が整わないため、県教委が平成10年12月16日～18日にかけて試掘調査を行った。その結果、幹線5号起点（JR野辺山駅側）では、連作障害防止のために耕土の削り取りと客土が繰り返し行われ、遺物包含層、遺構などは全く検出されなかった（県教委2000）。

一方、JR野辺山駅から国史跡範囲に向かっては、明治大学などの総合調査で多数の黒曜石が採取されている上に、部分的に遺物包含層などが残っていることが想定されたため、平成11年度から15年度の試掘調査および発掘調査は、県教委の調整により県佐久地方事務所・南牧村から長野県埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）に委託された。平成15年度には、報告書刊行のための整理作業を行った。

南牧村教育委員会　1982『概報・矢出川遺跡群－1981年度の分布確認調査－』
長野県教育委員会　2000『大規模開発事業地内遺跡－遺跡詳細分布調査報告書－』

2　調査体制

(1)　調査組織

平成11年度および15年度の試掘調査、発掘調査、平成15年度の整理作業の体制は以下のとおり。

	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度
理事長	吉村午良	吉村午良 (10月25日まで) 田中康夫 (10月26日から)	田中康夫	藤井世高	田中康夫
所　長	佐久間鉄四郎	佐久間鉄四郎	深瀬弘夫 (7月1日より)	深瀬弘夫	深瀬弘夫
副所長 兼管理部長	山崎悦男	春日光雄	春日光雄	原　聖	原　聖
管理部長補佐	宮島孝明	宮島孝明	田中秀幸	田中秀幸	上原　貞

調査部長	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	市澤英利
調査一課長	百瀬長秀	百瀬長秀	百瀬長秀	廣瀬昭弘	廣瀬昭弘
調査研究員	川崎　保	川崎　保	川崎　保	川崎　保	川崎　保
	上田　真	田中正治郎			
	(百瀬長秀)	(百瀬長秀)			

(2)　指導者・協力者

白田武正　藤森英二

(3)　発掘調査参加者および整理作業参加者

[発掘調査] 今井みすず　小須田利雄　小須田人一　佐々木貴久子　篠原節子　新海広子
高見沢とき子　寺島和子　林ひとみ　兵頭　勇　細川令子　宮下加世子

[整理作業] 阿部高子　市川ちづ子　今井博子　白田知子　佐藤志津子　鳥羽仁美　高橋康子
渡辺恵美子

第2節　調査の方法

1　調査の方法

調査は、県埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」(以下「方針と手順」) に準拠して、遺跡調査計画を作成し、実施した。

(1)　遺跡の名称と遺跡記号

遺跡名は、県教委作成の遺跡台帳に記載されている名称としている。また、発掘調査および整理作業の便宜上、アルファベット大文字3文字で遺跡を表記する遺跡記号を用いている。頭文字は長野県内を九つに分割した地区を示し、2番目・3番目の文字は遺跡名を省略したものである。各種台帳や遺物の注記記号にはこの記号を使用している。

遺跡名	読み方	遺跡記号
矢出川遺跡群	やでがわいせきぐん	DYA

(2)　遺構の名称と遺構記号

遺跡記号同様に各種台帳や遺物の注記は、便宜的に遺構記号を用いている。

記号　種類・性格

SK　土坑、竪穴

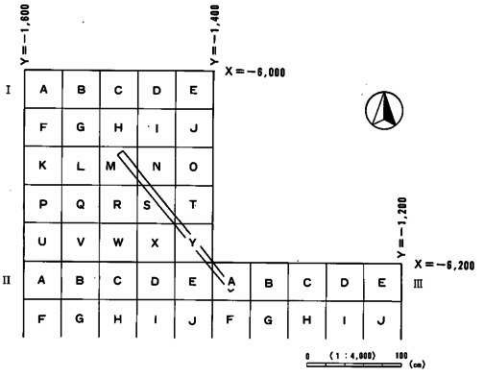
LM　ロームマウンド・風倒木痕 (「方針と手順」にはないが便宜的に用いた)

(3)　調査区の設定 (第1～3図)

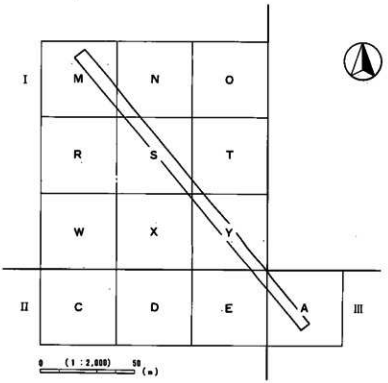
イ　「方針と手順」では、調査区は国土交通省国土地理院の旧測量法による日本測地系・平面直角座標系第8系 (X＝0.0000、Y＝0.0000) を基点に、200×200mの区画を設定し、大々地区とする。大々地区は調査範囲を覆う最小限度に留め、原則として北東から南西にⅠ・Ⅱ・Ⅲ……のローマ数字を用いる。

法が改正され、現在の測量基準は世界測地系になっているが、矢出川遺跡群調査時は、日本測地系の成果を用いて測量しているため、本報告書はすべて日本測地系を用いている。巻末の抄録掲載の緯度経度のみ世界測地系に換算した。

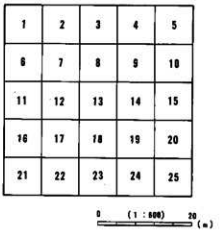
ロ　大々地区を40×40mの25区画に分割し、大地区とする。大地区は北西から南東へA～Yの順に計25



第1図　大々地区と調査範囲



第2図　大地区と調査範囲



第3図　中地区割付

個の大文字アルファベットを用いる。

ハ　大地区をさらに８×８ｍの25区画に分割し、中地区とする。中地区も北西から南東へ１～25のアラビア数字を付け、遺構測量、遺物取り上げの基準線とする。

ニ　さらに、２×２ｍの小地区を設けるが、今回の調査では採用していない。

よって、今回調査の矢出川遺跡群のグリッド表示は　大々地区－大地区－中地区となる。例）Ⅰ－Ⅴ－25

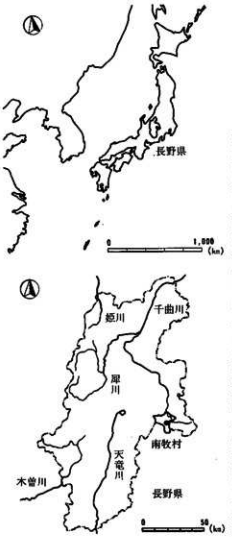
測量の実際は、公共基準点などの測量基準線を利用し、ベンチマークを設定した。遺構測量は原則として中地区を割り付け線として、オートレベルを利用した簡易遣り方測量を基本的に用いている。今回の調査では、遺構が検出された平成13年度のみに上記の調査区を設定した。

第２章　遺跡の環境

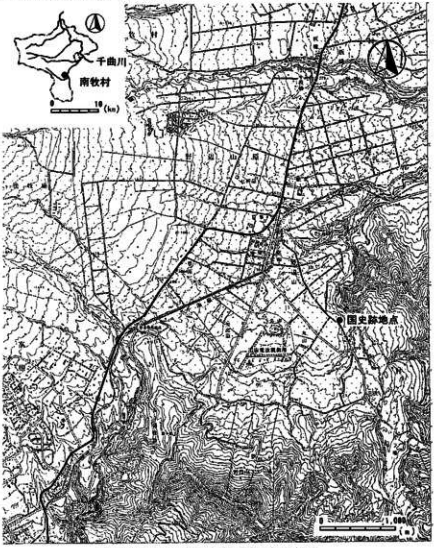
第１節　地形・地質的環境

矢出川遺跡群は行政区分からみれば長野県のほぼ東端に位置する南牧村の東側、野辺山原の南部にある。地形的には八ヶ岳東南麓のゆるやかに広がる火山性扇状地、水系からは日本海にそそぐ千曲川の支流矢出川の左岸低位段丘にある（第４・５図）。

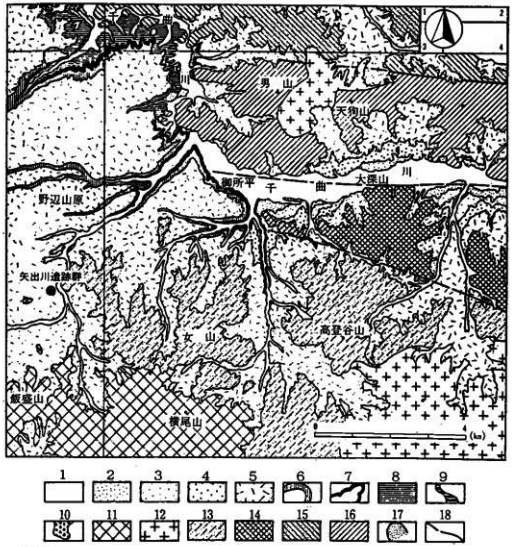
矢出川遺跡群のある野辺山原は火山性扇状地（野辺山原面）で、おおまかには上部更新統の風化火山灰と火山灰砕屑物（佐久ローム層）と中期更新世洪積層（野辺山原泥流）からなるとされる（長野県地学会編1962）（黒井1988）。この野辺山原面を形成する野辺山原層は、下、中、上部に３分され、下部層はスコリア層、火山角礫岩層、泥流堆積物、中部層は主として泥・泥炭～泥岩質泥・砂・礫層、上部層は火山岩起源の礫層・砂層などとスコリア層および溶岩を伴う火山角礫層であるという（町田ほか1982）（第６図・友野1986を一



第４図　南牧村の位置



第５図　矢出川遺跡群（調査範囲）の位置



1：沖積層　2：小川口面　3：馬場平面　4：秋山原面　5：野辺山原面（2－5：段丘堆積物）　6：野辺山原層上部　7：野辺山原層中部　8：野辺山原層下部および本沢溶岩・スコリヤ　9：高石川層　10：海の口火砕岩　11：飯盛山火山岩類　12：石英閃緑岩類　13：高登谷山層群　14：川上層群　15：合羽坂層群　16：天狗山層群　17：地辷り堆積物　18：(推定)断層　なお、右肩枠内の数字は対応する図幅名、1：蓼科山、2：十石峠、3：八ガ岳、4：金峯山

第6図　野辺山原地質図

部改変)。野辺山原層下部は友野邦彦（1986）によると、層中の黒曜石片のフィッション・トラック年代で約27万年前という値が得られている。

引用参考文献

長野県地学会編　1962　『20万分の1長野県地質図および同説明書』内外地図株式会社

熊井久雄　1988　「第四系八ヶ岳東麓地域」『日本の地質中部地方Ⅰ』（日本の地質編集委員会編）共立出版株式会社

堤　隆　1991　「地質」『中ッ原第5遺跡B地点の研究』八ヶ岳IB石器研究グループ

友野邦彦　1986　「村の地質」『南牧村誌』南牧村村誌刊行会

町田　洋・杉原重夫・横山秀司・下川和夫　1982　「野辺山原の地形とその形成過程」『概報・矢出川遺跡群－1981年度の分布確認調査－』

第２節　歴史的環境

矢出川遺跡群は当初、細石刃・細石刃核が発見された地点とその周辺が「矢出川遺跡」と呼称されたようだが、のちにこの地点を『長野県史遺跡地名表』(1981・以下『県史地名表』と略す。)や『南牧村遺跡詳細分布調査報告書―縄文時代～中世―』(1993・以下『村遺跡詳細分布』と略す。)(第７図)では「矢出川北遺跡」と呼称している。また、明治大学の分布確認調査では、Ⅰ～ⅩⅠ遺跡１～77地点１～92散布地からなる「矢出川遺跡群」の中の「Ⅰ遺跡」として把握されている(明治大学考古学研究室編1980・1981・1982)(第８図)。

『村遺跡詳細分布』が行政的な遺跡名称の模換となるが、その対象が縄文以降に限定されていて、旧石器時代の遺跡に関しては、今後あらたに設定されることもありうるようなので、本稿では無理に統一していない。研究史上の各文献で用いられている名称を用い、必要に応じて他の名称も適宜併記することにした。

県教育委員会の試掘調査での名称は、すべて「矢出川遺跡群」になっている(長野県教育委員会2000)ので、県埋蔵文化財センターの調査における遺跡名称は「矢出川遺跡群」に統一した。

「矢出川遺跡」は1953年に、芹沢長介、岡本勇が、川上村在住の由井茂也宅に宿泊し、同氏の案内で踏査した結果、細石刃核と細石刃を発見した(第１次調査)。翌1954年に第２次の学術調査が行われ、発掘調査によって、日本で最初に細石刃文化が確認された(芹沢・柳沢1982)。1963年に第３次調査が明治大学考古学研究室によって行われている(戸沢1964)。(以上『県史地名表』矢出川北遺跡、矢出川遺跡群Ⅰ遺跡に相当)

また『県史地名表』によると、最初に細石刃および細石刃核が出土した地点(矢出川北遺跡、矢出川遺跡群Ⅰ遺跡)の南側に位置する矢出川南遺跡(矢出川遺跡群Ⅳ遺跡)でも、1980年に発掘調査が行われている。また同遺跡では弥生土器や磨製石鏃が採集された(由井1970)。

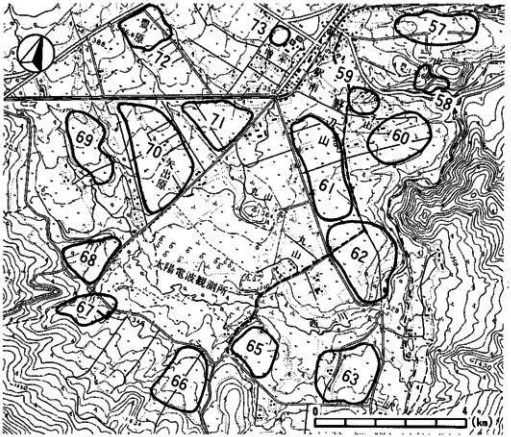
1979～1981年度の明治大学による「八ヶ岳東南麓における洪積世末期の自然と文化の変遷」研究によって、一帯の旧石器時代の遺跡が「矢出川遺跡群」として把握された(南牧村教委1981・1982)。また、その成果が「矢出川シンポジウム」として公開された(明治大学考古学研究室1980・1981・1982)。

京都女子大学考古学研究会も長井千尋、由井茂也とともに野辺山全域で行った分布調査結果を紹介している(京都女子大学考古学研究会1978・1980)。矢出川遺跡(矢出川遺跡群Ⅰ遺跡)で細石刃、細石刃核、二ツ山第Ⅰ地点(矢出川遺跡群Ⅰ遺跡に対応か)で細石刃、細石刃核以外に石鏃など、二ツ山第２地点(矢出川遺跡群Ⅲ遺跡に対応か)では有茎尖頭器、石鏃、丸山遺跡で細石刃、細石刃核、矢出原遺跡で磨製石斧が採集されている。

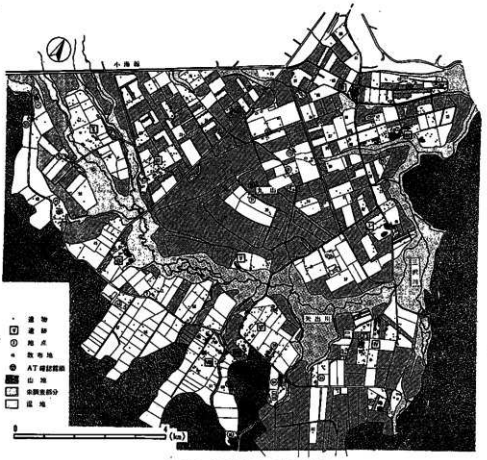
1990年に南牧村教育委員会が行った丸山遺跡の発掘調査では、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、楔形石器などが出土している(南牧村教委1991)。

1992～1993年に南牧村教育委員会が詳細遺跡分布調査を行い、1974～1979年の京都女子大学考古学研究会の調査結果をあわせて『村遺跡詳細分布』を刊行した(南牧村教委1993)。『村遺跡詳細分布』によると今回の農道拡幅部分に隣接する遺跡の二ツ山西遺跡(59)からは縄文時代中期土器、石鏃、磨製石斧、磨石、敲石、野辺山駅南遺跡(61)からは石鏃、矢出川北遺跡からは縄文土器、石鏃、弥生土器(箱清水式)が採集されている。また、明確な所属時期や地点は不明だが矢出原、野辺山原一帯では鉄鏃が採集されている(中村ほか1983)(菊地1986)。

矢出川南遺跡からは、古墳時代の土師器も採集されており、旧石器時代以降縄文時代、弥生時代を通して、野辺山には人の生活痕跡が見られるが、その具体的様相については不明の点が少なくない。



第7図　矢出川流域の遺跡分布図1



第8図　矢出川流域の遺跡分布図2

なお、1995年に「矢出川遺跡」として遺跡の一部が国史跡に指定された。今後とも遺跡の保護と活用が望まれる状況にある。

引用参考文献

菊地清人　1986　「窓町時代・安土桃山時代」『南牧村誌』南牧村誌刊行会

京都女子大学考古学研究会　1978　『信濃野辺山原の分布調査』（1978『長野県考古学会誌』31号所収）

京都女子大学考古学研究会　1980　『信濃野辺山原の分布調査Ⅱ』

佐藤達夫　1959　「長野県野辺山の石器」『考古学雑誌』44巻３号

芹沢長介・柳沢和明　1982　「矢出川遺跡」『長野県史考古資料編全１巻(2)主要遺跡（北・東信）』長野県史刊行会

戸沢充則　1964　「矢出川遺跡」『考古学集刊』2―3

中村龍雄・土屋忠芳・青木孝志　1983　『矢出川　水晶考古学』

長野県教育委員会　2000　『大規模開発事業地内遺跡―遺跡詳細分布調査２―』

長野県史刊行会　1981　『長野県史考古資料編全１巻(1)遺跡地名表』

長野県史刊行会　1982　『長野県史考古資料編全1巻(2)主要遺跡（北・東信）』

南牧村教育委員会　1981　『概報・矢出川遺跡群―1980年度の分布確認調査―』

南牧村教育委員会　1982　『概報・矢出川遺跡群―1981年度の分布確認調査―』

南牧村教育委員会　1991　『丸山遺跡―矢出川遺跡群ナイフ形石器文化期の調査―』

南牧村教育委員会　1993　『南牧村遺跡詳細分布調査報告書―縄文時代～中世―』

明治大学考古学研究室編　1980　『報告・野辺山シンポジウム1979』

明治大学考古学研究室編　1981　『報告・野辺山シンポジウム1980』

明治大学考古学研究室編　1982　『報告・野辺山シンポジウム1981』

由井茂也　1970　「野辺山高原の弥生式遺物」『長野県考古学会誌』９号

土屋忠芳　1986　「先土器時代（旧石器時代）・縄文時代（新石器時代）・弥生時代」『南牧村誌』南牧村誌刊行会

第３章　遺跡と調査の概要

第１節　遺跡と調査地の概要

矢出川遺跡群は、南佐久郡南牧村大字野辺山字二ツ山に所在する。発掘調査した範囲の標高はおおよそ1,340ｍ。地形的には八ヶ岳東南麓のゆるやかな火山性扇状地、野辺山原にある。野辺山原の東側に千曲川、西から南側には千曲川の支流矢出川が流れる。遺跡は矢出川の左岸に位置する。

南牧村教育委員会、明治大学などの調査の結果、野辺山原一帯に旧石器時代の遺跡が多く存在することが明らかにされている。矢出川遺跡群はこうした遺跡の中心的な存在とされる。

今回の調査地は、矢出川遺跡群Ⅲ遺跡、Ⅰ遺跡の遺物散布地をほぼ縦断もしくは沿った形となっていて、黒曜石の剥片などの石器が多数採集された部分である。

第２節　調査範囲と経過

(1)　平成10年度

県教委文化財・生涯学習課は平成10年12月16日～18日に道路拡幅部分（幅約３ｍ）に建設重機を用いて幅１ｍ×長さ３ｍの試掘坑を10箇所掘削、遺構検出・遺物採集を実施した（長野県教委2000）。

平成10年度の試掘調査部分では、とりあえず遺構・遺物などは検出されなかったが、もともと遺物の密度が少ないと予想される JR 野辺山駅側であり、国史跡指定範囲に接近する部分についてはさらに試掘調査が必要と判断された。

(2)　平成11年度

平成11年度からは（財）長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）が試掘実施（第９～11図）。

平成11年４月19日～29日　試掘調査。21地点63㎡。

10月28日～11月12日　工事立会。

(3)　平成12年度

平成12年11月23日～30日　工事立会。

12月６日～８日　試掘調査。12地点24㎡。

試掘調査の結果、ローム層中から剥片が数点出土（平成11年度19トレンチなど）したので、国史跡指定に接近する部分は、平成13年度・14年度、面的な調査が必要であると認められ、以下の工程で調査を行った。

(4)　平成13年度

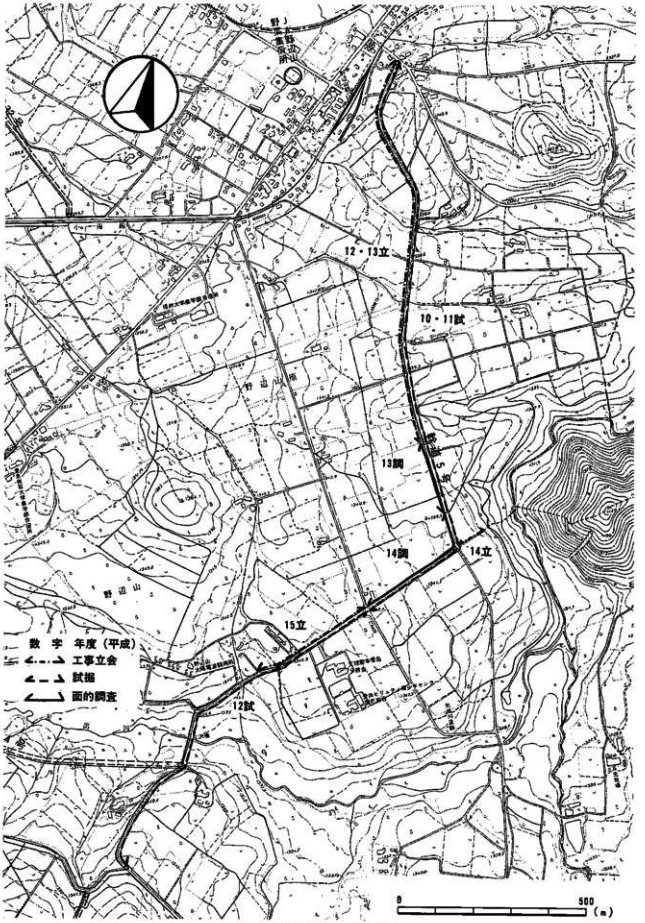
平成13年10月29日　発掘調査開始式。

11月２日　新日本航業単点測量。

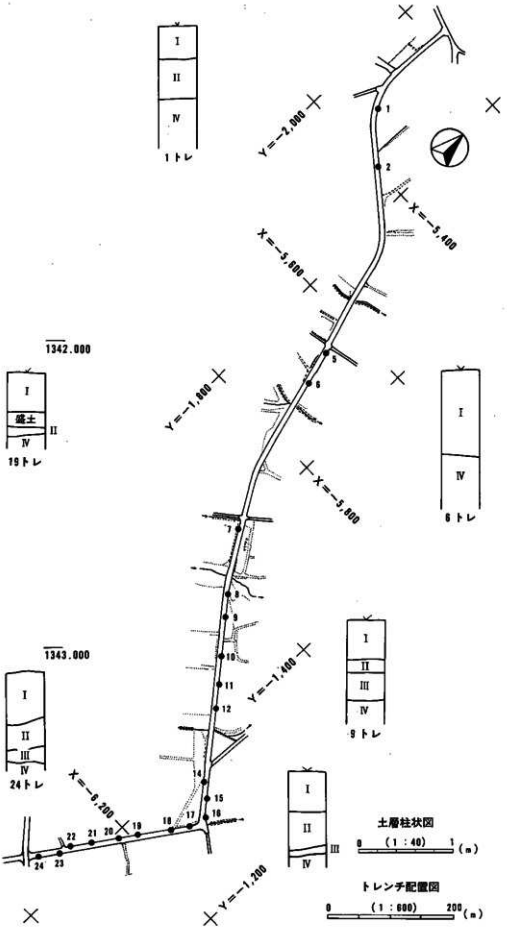
11月13日　北相木村教育委員会藤森英二学芸員見学。

11月14日　県教育委員会文化財・生涯学習課廣瀬昭弘指導主事現地指導。

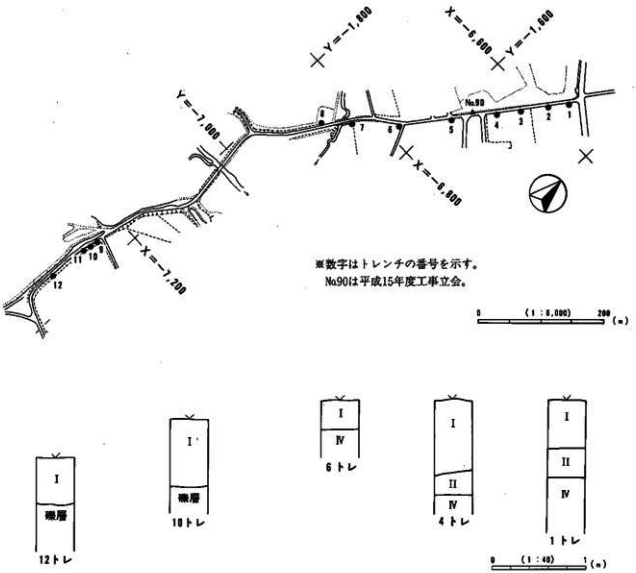
11月20日　終了式。1900㎡調査（第13図）。



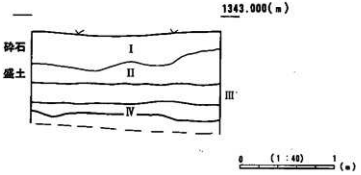
第９図　調査年度・内容と範囲



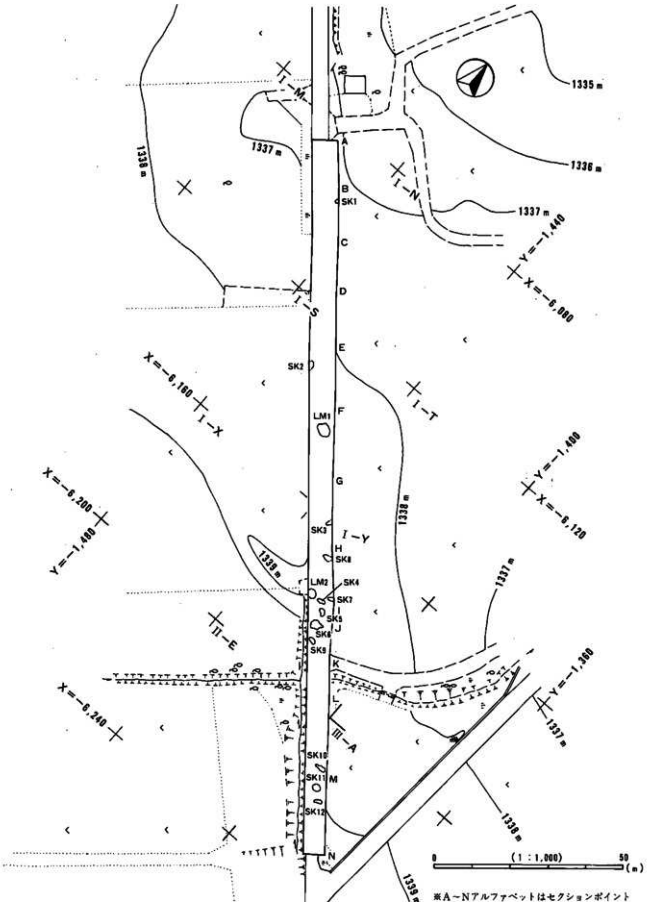
第10図　平成11年度試掘調査地点



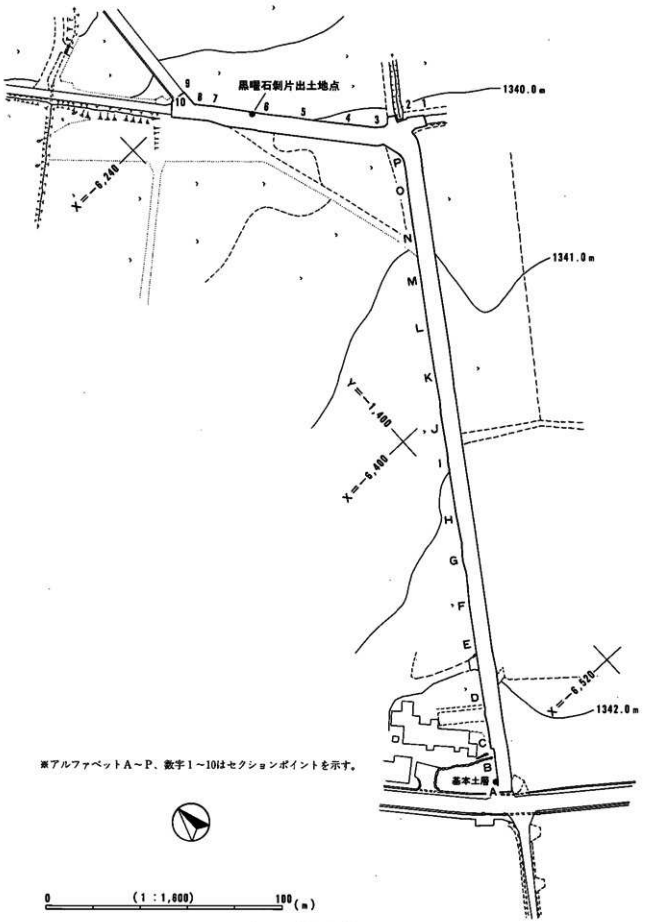
第11図　平成12年度試掘調査地点



第12図　基本土層



第13図　平成13年度調査範囲及び道構配置



第14図　平成14年度調査範囲

(5)　平成14年度

平成14年10月1日　コンテナハウス、簡易水洗トイレ設営。舗装剝ぎ開始。

10月3日　発掘調査開始。

10月10日　新日本航業測量基準杭打設。

10月21日　発掘調査開始式。

10月30日　終了式。2660㎡調査（第14図）。

11月5日　コンテナハウス等撤去。

12月5日～6日　工事立会。

(6)　平成15年度

平成15年度は、国史跡範囲から離れることや隣接する平成14年度調査部分からも遺物・遺構が検出されていないことから工事立会のみに留めた。

平成15年12月10日～平成16年1月21日　工事立会。

長野県教育委員会　2000「矢出川遺跡群」『大規模開発事業地内遺跡－遺跡詳細分布調査2－』
長野県埋蔵文化財センター　2000「矢出川遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報　1999』16
長野県埋蔵文化財センター　2001「矢出川遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報　2000』17
長野県埋蔵文化財センター　2002「矢出川遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報　2001』18
長野県埋蔵文化財センター　2003「矢出川遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報　2002』19

第3節　基本層序（第12図）

基本土層は、Ⅰ層（表土）、Ⅱ層（旧耕土層）、Ⅲ層（Ⅰ・Ⅱ層とⅣ層の漸移層）、Ⅳ層（地山のローム層）に大別される。地点によって多少の違いはあるが、基本的に共通している。

Ⅰ層　現耕土（黒色 Hue10YR2／1シルト）あるいは砕石、地山ロームの盛土の部分もある。

Ⅱ層　黒褐色（Hue7.5YR3／2）粘土質シルト。黒曜石剝片が出土。マルチを含む。

Ⅲ層　Ⅰ・Ⅱ層とⅣ層との漸移層。褐色（Hue10YR4／4）砂レキ混シルト。

Ⅳ層　黄褐色（Hue10YR5／6）レキ混シルト質粘土。西側ほどレキが多く、径が大きくなる。

第4章 遺 構

平成13年度の調査で、Ⅰ層（表土）・Ⅱ層（旧耕土）を除去したのち、Ⅲ層（Ⅰ・Ⅱ層とⅣ層の漸移層）からⅣ層（地山のローム層）上面へ掘り下げている段階で褐色土の落ち込みが検出された。いくつかは、旧道路建設時もしくは耕作による攪乱と考えられたが、それら以外は土坑とローマウンドとして認定できた。

これらの土坑やローマウンドは、舗装される以前の旧道路の基盤やその漸移層であるⅢ層に切られている。Ⅳ層を切っているので、旧道路建設以前で、Ⅳ層のローム層が堆積した年代よりも後であることは明らかだが、地層からは詳細な年代を特定することはできなかった。

さらに土坑については、周辺に集落遺跡の存在が認められないことから墓穴とは考えにくく、形態からは落とし穴に見られるような類型ともいえないことから現段階では用途不明としかいいようがない。

ただし、第2章第2節で触れたように今回の調査範囲にも含まれる矢出川北遺跡（矢出川遺跡群Ⅰ遺跡に相当か）からかつて縄文土器、石鏃、弥生土器が採取され、隣接する矢出川南遺跡（矢出川遺跡群Ⅳ遺跡に相当か）からは、弥生土器の優品が出土している。また、矢出川一帯には中世に属すると思われる鉄鏃も多く採集されていることから、縄文～弥生あるいは中世に属する土坑の可能性が考えられる。

第1節 土坑（第13・15・16図）

土坑 SK1 位 置：Ⅰ-M-10・15 構 造：(0.8)×0.5mのやや歪な長円形か。深さ0.4m。立ち上がりは明瞭。
土 層：1にぶい黄褐色（Hue10YR4／3）シルト。2褐色（Hue10YR4／6）シルト。脆い。

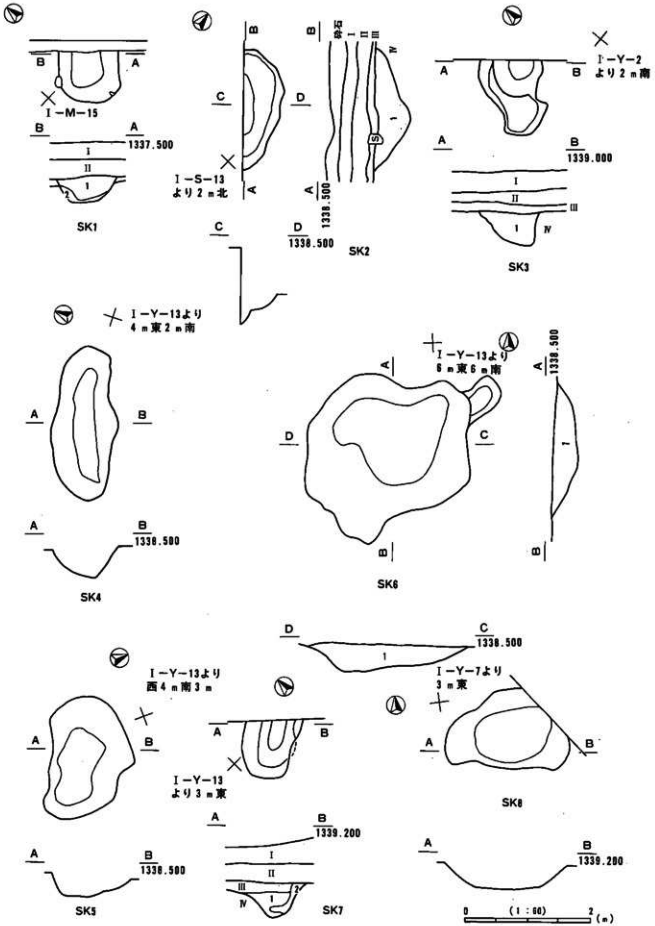
土坑 SK2 位 置：Ⅰ-S-7・8 構 造：1.9×(0.6) mの長円形か。深さ0.6m。立ち上がりは明瞭。中央部が一段と低くなる。
土 層：1灰黄褐色（Hue10YR4／2）粘土質シルト。焼土・炭を含む。ブロック状に径1cm程度のローム（Ⅳ層）が混じる。

土坑 SK3 位 置：Ⅰ-Y-1 構 造：(1.2)×1.0mの不整形。深さ0.5m。
土 層：1にぶい黄褐色シルト。

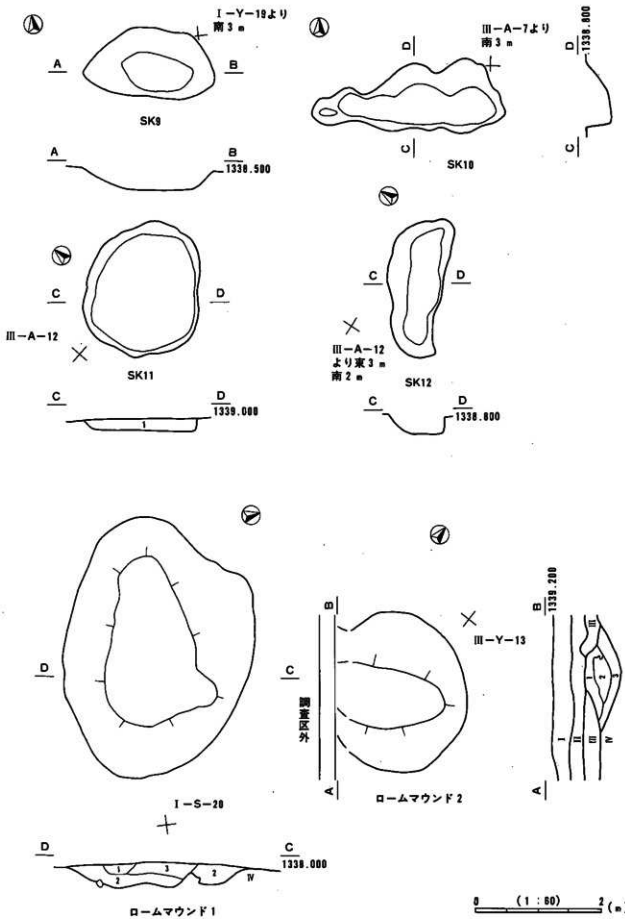
土坑 SK4 位 置：Ⅰ-Y-13 構 造：2.4×(1.1) mの長円形か。深さ0.6m。
土 層：1にぶい黄褐色シルト。

土坑 SK5 位 置：Ⅰ-Y-13 構 造：2.0×1.5mの不整形。深さ0.4m。
土 層：1にぶい黄褐色シルト。

土坑 SK6 位 置：Ⅰ-Y-13・18 構 造：3.4×2.4mの不整形。深さ0.4m。立ち上がりはなだらか。


I－M－15
1337.500
SK1
I－S－13
より2m北
1338.500
SK2
I－Y－2
より2m南
1339.000
SK3
I－Y－13より
4m東2m南
1338.500
SK4
I－Y－13より
6m東6m南
1338.500
SK6
I－Y－13より
西4m南3m
1338.500
SK5
I－Y－13
より3m東
1339.200
SK7
I－Y－7より
3m東
1338.500
1339.280
SK8
0
(1：60)
2
(m)

第15図　土坑その1



第16図 土坑その2・ロームマウンド

土　層：1にぶい黄褐色シルト。

土坑 SK7　位　置：Ⅰ-Y-8・13　構　造：(1.0)×0.8mのやや歪な長円形か。深さ0.5m。
土　層：1黒褐色（Hue10YR3／1）粘土質シルト。ローム混じる。2灰黄褐色（Hue10YR4／2）粘土質シルト。径1cm程度のロームのブロックが多く混じる。

土坑 SK8　位　置：Ⅰ-Y-7　構　造：2.0×(1.3) mの不整形。深さ0.4m。
土　層：1にぶい黄褐色シルト。

土坑 SK9　位　置：Ⅰ-Y-7　構　造：2.0×1.1mのやや歪な長円形。深さ0.3m。
土　層：1にぶい黄褐色シルト。

土坑 SK10　位　置：Ⅲ-A-6・7　構　造：3.0×1.2mの不整形。深さ0.4m。
土　層：1にぶい黄褐色シルト。

土坑 SK11　位　置：Ⅲ-A-7・12　構　造：2.2×1.9mの略円形。深さ0.2m。
土　層：1にぶい黄褐色シルト。

土坑 SK12　位　置：Ⅲ-A-12　構　造：2.2×0.9mの不整形。深さ0.3m。
土　層：1にぶい黄褐色シルト。

第2節　ロームマウンド（第13・16図）

中央にロームの高まりがあり、覆土土層中にもローム層が上位にあるなど土坑として認識した落ち込みとは構造が全く異なる。炭・焼土を覆土に含んでいて、風倒木の痕跡とされる。

ロームマウンド LM1　位　置：Ⅰ-S-14・19　構　造：4.0×3.0mのやや歪な長円形。深さ0.4m。中央部分がローム、その周辺が土壌化した土で囲まれた形になる。中央部は検出面より0.1m程度盛り上がる。
土　層：1にぶい黄褐色（Hue10YR4／3）シルト。少し土壌化したローム層。2黒褐色（Hue10YR3／1）粘土質シルト。炭・焼土を含む。3ローム（基本土層Ⅳ層）。

ロームマウンド LM2　位　置：Ⅰ-Y-12・13　構　造：2.5×2.0mの長円形か。深さ0.4m。中央部分がローム、その周辺が土壌化した土で囲まれた形になる。中央部は、検出面よ0.2m程度盛り上がる。
土　層：1暗褐色（Hue10YR3／3）粘土質シルト。基本土層Ⅲ層に似る。径1～2mmのロームを含む。2粘土質シルト。ローム（基本土層Ⅳ層）3暗褐色（Hue10YR3/3）シルト質粘土。土壌化すすむ。径1～5mmの炭・焼土を少し含む。

第5章　遺　物

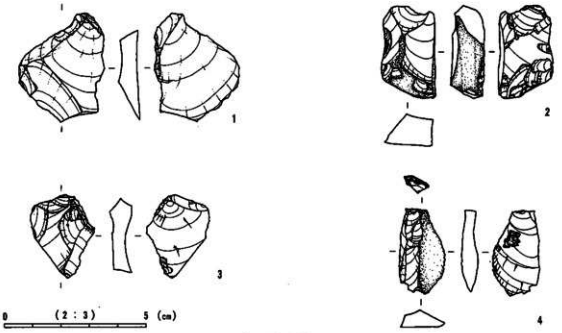
土器などの遺物はないが、試掘調査および本調査では、石器が5点、原石が1点出土している。

第1節　石器（第17図　巻頭写真下）

図化したのは4点いずれも剥片。1　平成11年度19トレンチ（第10図）で、盛土（ローム層を盛土したもの・Ⅰ層）出土。長さ38mm、幅30mm、厚さ7.5mm、重さ6.9g。頁岩か。とくに微細な連続した剥離は見られない。図化していないが、同一石材の砕片が同じトレンチから出土している。2　平成13年度の調査区内、ⅠないしⅡ層から出土。長さ32mm、幅20mm、厚さ11mm、重さ7.6g、黒曜石。両極からの剥離がある。二次加工のある剥片。下辺には連続した剥離が見られるが、上辺の剥離は新鮮な剥離のようにも見える。3　平成14年度の調査区内、Ⅱ層から出土（第14図）。長さ29mm、幅23mm、厚さ8mm、重さ4.2g、黒曜石剥片。左側辺にかすかに微細な剥離が見られる。4　平成14年度調査区周辺で表面採集。長さ30.5mm、幅16.5mm、厚さ7mm、重さ2.7g。黒曜石。右側辺6mm幅の微細な剥離が見られる。

このほか、平成15年度の工事立会い時に№90地点で長さ72mm、幅68mm、厚さ36mm、重さ230.8gのチャート原石が採集されている（第11図）。

以上、出土層位も人為的な撹乱の影響が想定される層から出土しており、出土層位からこれらの遺物の年代をうかがうことは難しい。また、形態や素材の特徴からは弥生時代以前の縄文時代あるいは旧石器時代に属する可能性があると指摘するに留めざるを得ない。



第17図　石器

第6章　成果と課題

はじめに　八ヶ岳山麓の火山性扇状地である野辺山原の裾野に位置する矢出川遺跡群をほぼ横断する形で、農道幹線5号は切っている。今回の調査で矢出川遺跡群の現状の一部が明らかになった。

矢出川遺跡群の現状　昭和50年代までは表面で比較的容易に黒曜石が採集できたというが、現在はなかなか難しい状況である。実際の遺跡の調査範囲からは、黒曜石製剥片4点、頁岩製剥片2点、チャート原石1点が採集されたにとどまった。

学史的には、日本列島ではじめて細石刃と細石刃核が発見された遺跡として、非常に著名な遺跡で、平成7年には遺跡の一部分が国史跡に指定されてもいる。今回の発掘調査した農道部分については、旧石器時代の文化層は遺存状況が非常に悪いことが判明した。

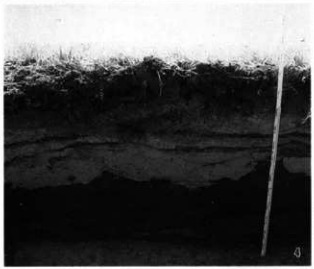
しかし、土坑が検出されたことにより、その厳密な時期を比定することはできなかったものの、野辺山原一帯に旧石器時代以降の人間の営みがあったことは間違いない。

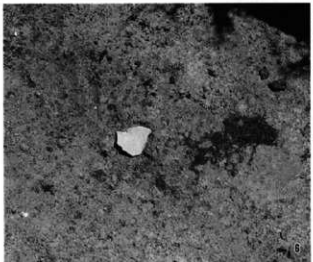
今後の課題　今までに多くの学術的な総合調査が行われているにもかかわらず、旧石器時代の遺跡の範囲が行政的にあまり把握されてこなかったという点が指摘される。遺跡の保護・活用のためにも早急に矢出川遺跡群をはじめとする旧石器時代の遺跡の範囲・性格などの把握がなされるべきである。このではままなし崩し的に遺跡を葬りさられてしまう。

次に、旧石器時代以降の野辺山一帯の歴史をより具体的に解明すべきである。幸いにして縄文時代以降については、遺跡分布地図が作成されているのであるから、今回のような埋蔵文化財の発掘調査の成果とあわせて、当該地域の歴史・文化を解明していく必要がある。

長野県のみならず全国的にも有名な矢出川遺跡群は文化的な「地域の宝」である。これを活かして地域から情報を発信できるまたとない素材であるので、今後積極的な活用が望まれている。

平成11年度
試掘調査
1：第1トレンチ
調査風景
2：第1トレンチ
土層断面
3：第3トレンチ
調査風景
4：第18トレンチ
土層断面
5：第19トレンチ
調査風景
6：第19トレンチ
石器出土状況
7：第19トレンチ
土層断面

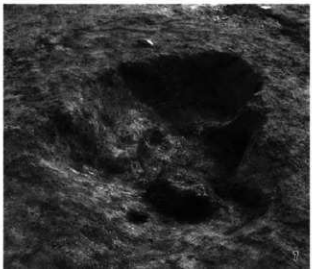




写真図版 2

平成12年度試掘調査
1：第1トレンチ
　試掘風景
2：第5トレンチ
　土層断面
平成13年度調査
3：調査前風景
4：舗装除去後風景
5：表土掘削風景
6：鋤簾粗掘風景
7：両刃精査風景
8：調査風景

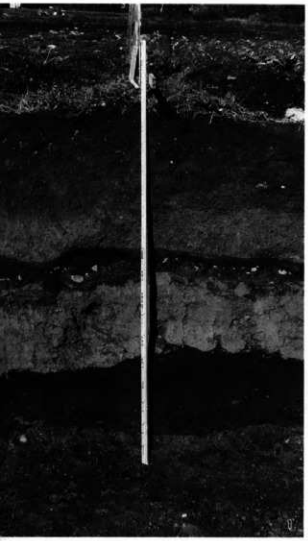
平成13年度調査
1：土層断面
　A～B地点
2：土層断面
　H～J地点
3：SK1土層断面
4：SK1完掘
5：SK3土層断面
6：SK4完掘
7：SK5完掘
8：SK8完掘



平成13年度調査
1：LM1検出段階
2：LM2土層断面
平成14年度調査
3：調査前風景
4：表土掘削風景
5：壁面粗削風景
6：鋤簾粗掘風景
7：IV層上面
C～D地点
8：IV層上面
D～E地点

平成14年度調査
1：測量風景
2：だめ押し
　C～D地点
3～7：土層断面
3：E～D地点
4：N地点
5：N～M地点
6：1～2地点
7：5～6地点

写真図版 6



平成14年度調査
土層断面
1：M地点
2：1地点
3：6地点
4：7地点

平成14年度
工事立会
1：U字溝部分掘削
2：同部分土層断面
平成15年度
工事立会
3：拡幅部分掘削
4：土層断面
No84地点
5：土層断面
No86地点

報告書抄録

書名	県営畑地帯総合整備事業野辺山地区発掘調査報告書－南牧村内－
ふりがな	けんえいはたけちたいそうごうせいびじぎょうのべやまちくはっくつちょうさほうこくしょーみなみまきそんないー
副書名	矢出川遺跡群
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	
編・著者名	川崎　保
編集機関名	(財) 長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒387-0007　長野県千曲市屋代清水260-6　長野県立歴史館内 Tel026-274-3891
発行年月日	2004年（平成16年）3月15日
所収遺跡名	矢出川遺跡群　やでがわいせきぐん
所在地	南佐久郡南牧村野辺山字二ツ山
コード	市町村20305・県遺跡番号352
緯度・経度	北緯35°56′51″ 東経138°28′51″ (旧日本測地系北緯35°56′40″ 東経138°29′02″)
調査期間	1999～2003年
調査面積	4,647㎡
調査原因	県営畑地帯総合整備事業野辺山地区幹線5号拡幅工事
立地	野辺山原扇状地上
種別	遺物散布地
時代	旧石器時代～縄文時代
主な遺物	石器（黒曜石・頁岩の剥片）
特記事項	頁岩および黒曜石の剥片、チャートの原石。時期不明の土坑12基。

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書

県営畑地帯総合整備事業野辺山地区発掘調査報告書
－長野県南牧村内－

矢出川遺跡群

発　行　平成15年（2004年）3月15日
発行者　長野県佐久地方事務所
長野県南牧村
（財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒387-0007　更埴市屋代清水260-6
長野県立歴史館内
TEL　026-274-3891
FAX　026-274-3892
印　刷　第一印刷株式会社